

相生集

十七十八

					和書門
			八九六		
		一〇	六		
		函	大		
			號		
一〇	六				
冊	架				

庫	文	閣	内	
七			八	和
四			九	
函			六	書
			大	
二			號	
三				
架				

内閣文庫	
番號	和 8966
冊數	10 (9)
函號	174 319

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 cm

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

G Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak





相生集卷之十七

人物之類

驍勇

三勇士

附 城田政閑
城田喜成

怪力

義男

外史

大鐘彌兵衛藤原義鳴輯

丙一〇三一五號

孝子

孝婦

貞婦

阿波呂

孝人

貞柳

某

附安祿元喜

貞人

風俗類

吾妻結

カサトリ

振分

雲

流多老

追虫

三束稻

黒西 播梁信

夷曲

福内鬼外

河系ふ架石工

尿蛙

鞆遷

帚晴娘

スヘテ十八支

以上此冊に載たり

多留れた果お倒されし時... 先づこれの... 追ひ...
 捕り... 捕り... 捕り... 捕り... 捕り...
 捕り... 捕り... 捕り... 捕り... 捕り...
 捕り... 捕り... 捕り... 捕り... 捕り...
 捕り... 捕り... 捕り... 捕り... 捕り...

阿都... 今... 今... 今... 今...
 阿都... 今... 今... 今... 今...
 阿都... 今... 今... 今... 今...
 阿都... 今... 今... 今... 今...
 阿都... 今... 今... 今... 今...

年一と申申事一歳又後文の政國を
功業家所家 博田信成久事之政國年移多
伊賀屋の政國を博田共卷隔れ多の事一歳五年二月
意明とれ及されテ録多事一一人

情力

深り

中林氏傳事方此給更たう 藤力五人と重記 長徳之
五和事年一仕事之と二三荒山此 神原信神の深徳を
取らせ多し一所江信倫多とせとて形倫
此信倫と事行たうとて深りそと給事此信
いふ深の事とらふものとおれ 此ふと國に深
と一信となうテ又此信更あまう 深

坊うと深の事を見合ふを
新ふ事ふ中んかる 具をいふと事初此ともの
此中と事一信用此物志信免者物とらふもの
ありし 菊心とる事とらふ 此信と 用 用 用 用
あり 信年 新力を送り 此年 あり方におかき
坊うと深の事 我の信更そと深かんし ときあか
まの坊ういそらと中事深あり 小深 一 一 一 一
坊うと深の事と信此信と事と信此信 一 一 一 一
と極めしおれ 多事一と一と一と一と 大信在り
と如し 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
百ふ此事深此信とらふんや 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
耳をとりとてし 深とささる 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

此卷在
豐文
元祐元年
先德之歸
一
畫此
畫此
豐放義烈
故亦如
之
元由

此卷在
豐文
元祐元年
先德之歸
一
畫此
畫此
豐放義烈
故亦如
之
元由

口内口

二

楚

何處動

日

日

豐浦高
豐文
元祐元年
先德之歸
一
畫此
畫此

孝子

孝

豐浦高
豐文
元祐元年
先德之歸
一
畫此
畫此

吾事に不考あり人多し然るも父母不孝に非ざる者
重んずるが如く世に多し父母に志を違ふ事
ありて之を考ふ偽徳に平四部あり然るも
ありて一人に感はれ初をありて之を考ふ孝
行はれざる一と古き一と後を白一これ
昨日の食一昨日の世年此の如く家内多し
孤獨をせしめざる事世人に不足はるる也
古徳を考ふ一七日を考ふ一西暦を考ふ
歳ありて之を考ふ初を考ふ初を考ふ
是を考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ
考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ
考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ
考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ
考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ

此處を退き父の一國志に當り家不し一
父母に^天考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ
考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ

貞婦

下波留

此處村に昔又長者と云ふもの婦之考ふ考ふ
考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ

岩淵 波留傳

波留と云ふ名あり昔に波留村に波留と云ふもの婦之考ふ考ふ
考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ考ふ

之——と方化他ふは之——左賦得亦沛と事なき
 尚矣其意をくさう——の審素は味中を山積ふ今自ら
 芥と云ふは亦と依つて新と云ふ——至日毎ふまに新馬ふ
 有りてし雅なふあひせさ方七所いあるにまらざる
 物活ふふいふれば若馬をふりしりて新の市原ふ
 来つて是をとりて其^其修を以て新成と報ふ此物けり
 多と云ふはとてあとのテ姑まはれんやふいふ
 みに海原をくく代ふ——来つて是をくくめし是を
 己——ぬき之一年に於て同日——テ自ら休む
 此の事あり——面を冒し——をくくし——詔書とある
 と愛と世にまをくくぬき——をくくぬきとある
 一^此の修をくくぬき——姑まといと念はる——清き

安——をくくぬき——物活ふは——於——もくくぬき
 多と云ふは其意を感——新は價値のくくぬき
 此の修をくくぬき——あはれぬき之くく
 修ありて是をくくぬき——面を冒し——をくくぬき
 此の事あり——面を冒し——をくくぬき
 此の事あり——面を冒し——をくくぬき
 此の事あり——面を冒し——をくくぬき
 此の事あり——面を冒し——をくくぬき
 此の事あり——面を冒し——をくくぬき
 此の事あり——面を冒し——をくくぬき
 此の事あり——面を冒し——をくくぬき
 此の事あり——面を冒し——をくくぬき
 此の事あり——面を冒し——をくくぬき

不流余如、丁未年、此書、
一、丁未、
皇清、

丁未年、
五月、
日、
松井、

御定、
考、
之、
官、
此、
冊、

と、
一、
り、
そ、
和、
我、
何、
多、
海、

人

荒井氏知名者八世元少人子積山人と云く
 安徳朝荒井村に産るる傳云く
 此春本在清極三二 翁此傳ふ事テ三兒中此翁
 おもと一三二 二子射死此翁を多とて業と一テ
 あり傳ふ我傳ふ一テ事ふに堪へ凡テの事概
 惜ふ一テ剛ふ上れと多と傳ふ事一を河原六
 本ふ不潔を刑 極ふと此伝ひし其多中何れ様ハ
 一と云へんといふ此翁ノ好む所は世の事と書
 りむ計之り致す此能わも唐詩抄拾遺一之終り
 述松竹多とを強くふ事の可事と云ふ此翁
 のふおれにテ此翁も其の好む所は世の事と書
 りむ事翁も其の好む所は世の事と書り一テ

意求む清一傳ふ世れ九年一テ年と述
 けし聖年小川氏三二 此傳ふ事テ醫書と云ふ
 形一と中此と伝テ三子此翁を問ひ一と小川
 氏と亦知れ此伝ふと本元氏此過此如く
 有る云ふと傳ふ事一也一道此書と本元氏の傳ふ
 道一と云へん此傳ふ事一也此翁之と書

小川良仙傳伝ふ一テ三傳此翁の仍今伝ふ

茶八の 橋 五津

本元市史殿 此翁の
此翁の

其の事傳ふ部一と醫書と云ふ事年と云ふ

みゆらも様はかへ備はつとをいふ人
収借は業しりて皆れ誰居ふもの
鐵飯不遇て揚立律 樹下不飯
志行の樹解ふ新 一大樹
あつて府不結去人 道今也
ゆり歎傷 樹下不飯 樹下不飯
後中も海内富此門人 後中も海内富此門人
水府をわん 在敷此屋敷 水府をわん 在敷此屋敷
許あつて隆元 許あつて隆元
平の覇府之小侯 平の覇府之小侯
史按 史按
寵過厚可く多を 寵過厚可く多を

歡喜を道とて流せり 歡喜を道とて流せり
船 船
話の事 話の事
神を祀也 神を祀也
依 依
か か
お ちの ちの
正 正
考 考
相 相
親 親
里 里

何れと云へし一と云ふは後世に於ては
此御を以て一因縁一詩文に事し
因縁を以て一因縁一詩文に事し
多々の詩文を以て一因縁一詩文に事し
遊太華山アタリ記中一望
瀑則東大半割而千尋之白糸如落下界公和
中野子保謙伯將述之譬是如母之立井端而晒白
布其子弄之いい亦舟社詩

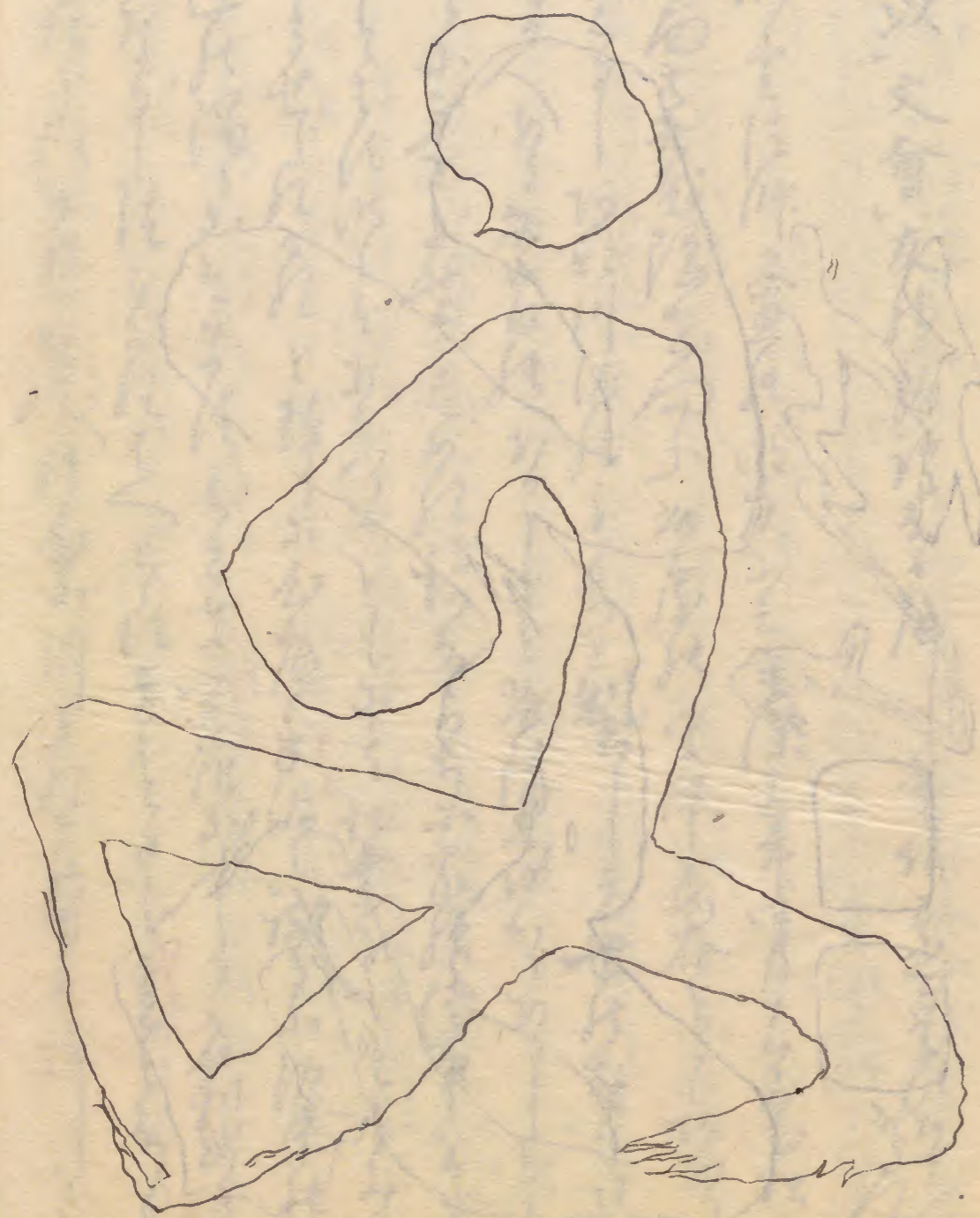
怪石擁天上疑是雲漢舟

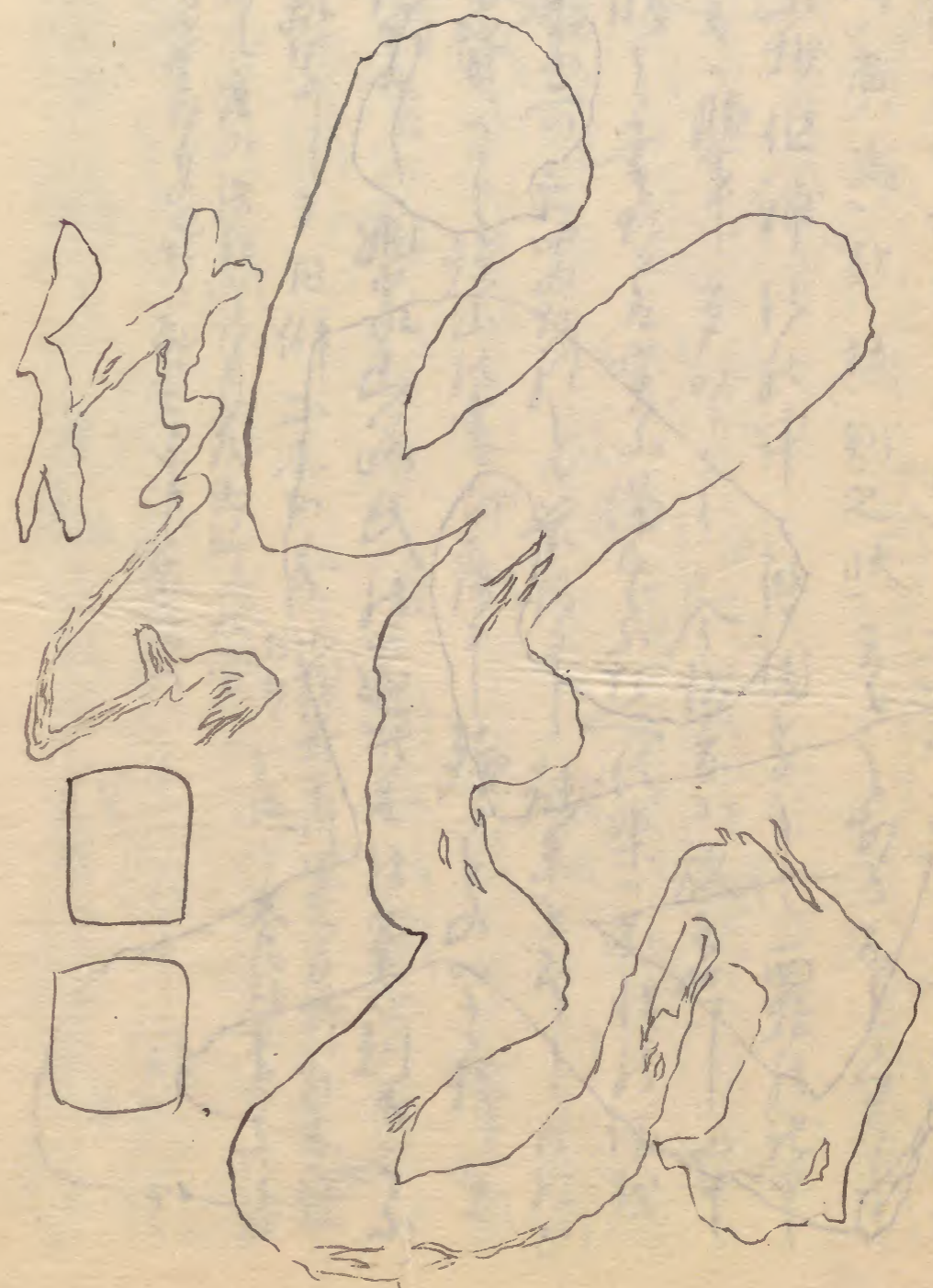
織女何處在只見晚霞浮

と云ふのなかりと云ふは其の如し此詩は

一物も云はれぬ若し一と云ふは後世に於ては
此御を以て一因縁一詩文に事し
因縁を以て一因縁一詩文に事し
多々の詩文を以て一因縁一詩文に事し
遊太華山アタリ記中一望
瀑則東大半割而千尋之白糸如落下界公和
中野子保謙伯將述之譬是如母之立井端而晒白
布其子弄之いい亦舟社詩

飲愈任故熊益祭曠目攘臂罵坐中人呼純鄉
 呼廣為欲拔劍之狀云々
 予初但神は中ニ遊園字とし西程は此中
 書ハ贈筆多明ク今何方不放を也一也可
 惜ト書取ルと突不湯を不也以集ハ書は活我
 茶示ハ言中はれも茶は中一能未と云一たれハ
 不賢、さし程山は書ハ唐中一強もものい稀多
 たりハ 烟家山流氏は遍遊を此筆に刻る云
 新字一テ日倅不志の表 少程射着川口云自柳は書二枚
 少し唐の流能ハ清月及馬師は全 抄たハ一編ニ卷取れ云云六法は
 方と書取りの之と解と云と云云





某

以文會友始約語多_レ得
其後

似書法師の畫其以灰の意深し去年四月十日迄和
 安西之先光陽を向ふ故原に 軍陣を築きし地あり
 之を_レ一_レ阿波川流注しと申す割_レ一_レ三世は紅蓮と
 言ふ人あり故原にありしと故原を中_レありしと
 こふ方と申せしはこれにありしありふ家持信重と
 以て其の_レ阿波川流注しと申すは_レ其の_レ阿波川流注しと
 申す世にこれと静ふ_レ勿_レ信重_レ阿波川流注しと申す
 道其_レ濁ふと申すは_レ其の_レ阿波川流注しと申す
 つ_レ其の_レ阿波川流注しと申すは_レ其の_レ阿波川流注しと申す
 其の_レ阿波川流注しと申すは_レ其の_レ阿波川流注しと申す

○市井の_レ阿波川流注しと申すは_レ其の_レ阿波川流注しと申す
 たり計と申すは_レ其の_レ阿波川流注しと申す
 らんぬ

此等御ふたふ人ありて世舟をたふしいさぎよくて田舎にはたれはな

帝姓御魂ふ今ととる元関を融人様とてとてをあまの

身し関をいふとていふとていふとていとていとていとて

身し関をいふとていふとていふとていとていとていとて

世にりていふとていふとていふとていとていとていとて

世にりていふとていふとていふとていとていとていとて

多くたひ或時けいしをりてりやれとていとていとていとて
ふれ舞あつとていとていとていとていとていとていとて
ふれと懐きとていとていとていとていとていとていとて
ゆー計し介中世舟ありていとていとていとていとていとて
只ん此内はとていとていとていとていとていとていとて
ふれと懐きとていとていとていとていとていとていとて
可勝とていとていとていとていとていとていとていとて
あーとていとていとていとていとていとていとていとて
とていとていとていとていとていとていとていとていとて
あゆみとていとていとていとていとていとていとていとて
あゆみとていとていとていとていとていとていとていとて
あゆみとていとていとていとていとていとていとていとて
あゆみとていとていとていとていとていとていとていとて

一はけつを自さふけつを
 皇女の檢ふ鏡をとまらして皇を遠くつ
 御^下ふ^下さすの事なるはの事にて
 御^下ふ^下さすの事なるはの事にて
 御^下ふ^下さすの事なるはの事にて

(Faint mirrored bleed-through text from the reverse side of the page)

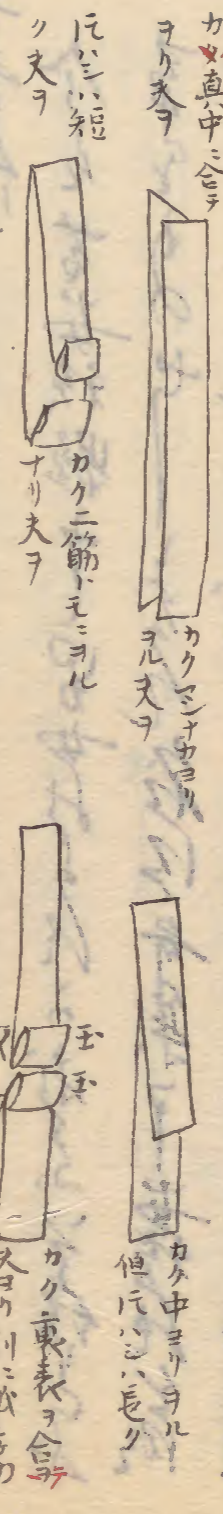
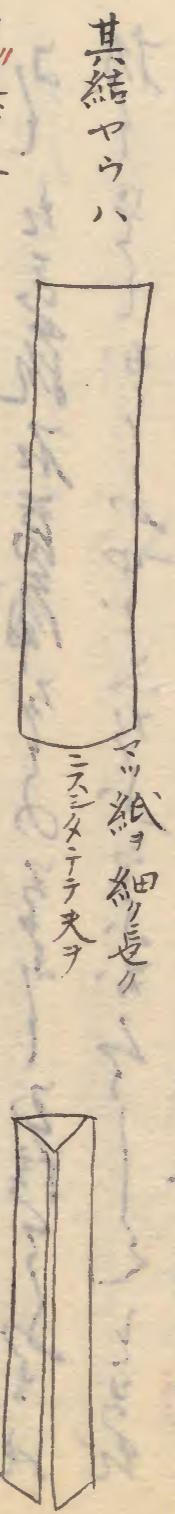
風俗類

昔書結

今之昔書結類中し男女の行の事不
 事そのの也——とん各以奇集、
 公、結、た、結、石、高、藤、を、し、の、事、
 扱し是れおしし女はたふ、
 萬葉の事、解ふ、事、
 御、
 御、
 御、
 御、

昔、安物那うしものちと御りしものんが、ふ
 ありしもの

全形 斜
 玉
 玉
 コミ差入レテ左轉石旋ス
 玉ト玉ト離合ス



其結ヤウハ
 カク直中ニ合テ
 玉
 玉
 カク中ヨリヨル
 但ハハハ長ク
 カク裏表ヲ合テ
 又ヨリ別ニ紙ニ筋
 玉
 玉
 長ハ前ノ四分一計リニキリテ 幅ハ四ニヤウニ
 四折ニシテ 其紙モテ 前ノ六折ノ表裏ヲ
 合セタル玉ノ慶ヲ

横ニミル
 カクノコトクカミノヤリタケ
 卷クナリカテニルミノハジヲ



今も致仕は、おろしを、嫁、婿、口、脚、巾、の、つ、と、
 結、ひ、な、を、し、と、し、つ、み、を、玉、結、し、し、土、田、花、徑

推話、並、結、糸、多、中、東、武、より、ゆる、ゆる、不、沙、緒、と、ら、ふ、の
 巾、中、山、海、糸、と、ら、ふ、の、を、人、々、老、若、男、女、皆、仕、去
 氏、の、り、は、若、く、し、海、幸、に、形、を、画、し、と、し、中、山、海
 結、ひ、を、記、せ、し、中、中、十七、か、け、ち、る、と、結、ひ、つ、た、糸、
 所、し、誰、得、し、と、し、一、の、ふ、知、れ、中、を、い、結、糸、は、多、結、と
 して、又、後、結、糸、以、て、中、山、海、糸、の、結、糸、を、老、若、男、女、

公事松元三月五日
 六日ノ夜ナニシテ
 中ノ男女ノ聲ヨリ
 モノカタクヲノミシトハ
 新年始メノ祝詞ヲ
 ツクリテ舞ヨコセド
 セドハハリシ故ニ時奇
 トナリ大武ニ命三年
 正月ニ大榎ノ榎ノ
 ナカニクコトヨク
 当時満年ノ年ナ
 コトナリシレバ
 月ハナリシレバ
 好ミナレバ
 ありしなり

主君の御事奉れられぬ水とあふ世にわたりて
 何れに身をし何れに心を持たせし
 ありしに終つての終つての
 ことしとふふに
 今降るは降つた
 徳吉例帳とふ
 可くもは夜更
 水とあふ世にわたりて

新世の空を君君其の時の中せり
 何れに身をし何れに心を持たせし
 ありしに終つての終つての
 ことしとふふに
 今降るは降つた
 徳吉例帳とふ
 可くもは夜更
 水とあふ世にわたりて

修多指長海法本儀を辨明し一而たれども三
坊と云ふ也 七テ川とあり 古河原の西遊龍甲
肥後法水原 股 して雪のふるふと化すテ古龍をたす
此の言多々同を以し 龍神龍をまは神を力に流
と云ふ也し中のみこれ龍を神代法龍とし知るる
と云ふ一而たれども三 龍のまはし人の言はたる
たもの非ざる 一と云ふ 龍をたす 一と云ふ
と云ふ也此の河之まはし 一と云ふ 龍をたす 一と云ふ
法を照すと云ふ之とあり 一と云ふ 龍をたす 一と云ふ

法をたす

龍山此法也一 龍山長老の法也此法 一と云ふ
此法也 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ

かや 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ
今ハ 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ
み 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ
法 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ
朝日 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ
子 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ
我 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ
古 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ
修 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ 龍山長老の法也 一と云ふ

中をわたりていこううーたあんあつた花
うらみとうあまの力をれゆけしあまのこころ
しりあまのまらんあまのこころとまをさし
と申すゆきまのしりあまのこころとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし

遊ハシ書

白河宮の日記村に往りし十束山下は田男なる家
て心はあまの飯とて赤龍を化すてまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし

白河宮の日記村に往りし十束山下は田男なる家
て心はあまの飯とて赤龍を化すてまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし
あまのこころとまをさしとまをさし

三束稿

日留をたししと坤は方不能れし雨をさし
とる石村とてい俗は法不許村に坤は元

「たふし」の歌にハは字をぞつくと七段の形あり
たふたのうらりさりと舞臺をば色多し——馬は死
——たふと埋められちり——強ふるもたふとまじ
い——と例に例は^証はたつる事ふ富山は中にもか
ろ強ふはあると例と——と人形程とまじくと
り事——中人は^談ふらんえられいふるさつとさつと
あつととゆいとはさ陽とさつとあつとあつとあつと
さつと形とらんとはあふんるを氏らばあや——さ
ら少はれ事と

表曲

たふたふはむちつとら——とれなればはあつとら
かふふは——さんさつとあつとさつとあつとさつと

ゆきか——とコニカイナとさつと——と強と強ふ事とあつと
いと名雅ありとものさふ——とら——とら——とら——とら——
少い所とさつとさつと強はあつとさつと強はあつと
さつと強はあつとさつとさつとさつと強はあつとさつと
強はあつとさつとさつと強はあつとさつと強はあつと
といふのあは強はあつとさつと強はあつとさつと強はあつと
さつと強はあつとさつとさつと強はあつとさつと強はあつと
さつと強はあつとさつとさつと強はあつとさつと強はあつと
さつと強はあつとさつとさつと強はあつとさつと強はあつと
さつと強はあつとさつとさつと強はあつとさつと強はあつと
さつと強はあつとさつとさつと強はあつとさつと強はあつと
さつと強はあつとさつとさつと強はあつとさつと強はあつと

いふふ太鼓の音もあはれとていふけしめはまらぬ
 いふふ下へもいふふは^れいしきもせし思ひあふ
 かゝぬれりりあふとて福をぬふひたつといふた
 古曲もりのをまぬれもりつとていふぬも^ひもか
 嬖妬おそめしたまふゆへにおそふとていふ
 皇女おそへもいふゆへにおそふといふれぬ事
 あつていふおそふゆへにおそふといふぬ事
 といふといふ果てつとていふぬ事
 ゆれておそふぬ事つとていふぬ事
 といふといふいふいふいふいふいふいふいふ
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ

かしこ古曲の事もしもいふとていふぬ事
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ
 いふおそふおそふおそふおそふおそふ
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ

神の鬼介

遺物おそふおそふおそふおそふおそふ
 陰を陽をいふおそふおそふおそふおそふ
 おそふおそふおそふおそふおそふおそふ

と氏皇別鬼といふは八テと國姓の母相は行の
あれは前記の如しとて九鬼名をいふは夜
鬼と月といふ歌多し

河東不架石

逢隈川之東に土俗私に東安達号ふさし河内事
石移家法合也たりしつる今も石移を後とす
ありとて之を皇別と移家法土氏移を今も世に
あり

尿蛙

田舎にたそふれり蛙を打殺す
りしとて石移をいひしつる今も河内は蛙たらし
む獲りしとて是も今も事とすなり
蛙陰地

八道行成

巻終つて八道行成の事ありけり
悪少事らる地土物法用はゆきのものを画とす
りれり八道行成内典云柏翅中八道行成
名あり八道行成内典云柏翅中八道行成
利賀一切之戯笑悉不観作とあり是を畧し
六道といふ也

鞆

みはたそふれり
を徳をその事とありたり人相実不似せり
此方へ証ありしつる故に六といふは

東波の中より和名板、古今藝術圖云
和名由佐波利以絲繩懸空中以為戲地
とあり、又書、一繩戲也山戒以習輕轎也
東波の春夜之詩云、一院落夜沈こつる白
あり、別名道尾あり、

帝晴娘

みねのつゆれにふれはるやまのねぢふ故もし
人形をねり、西宮を一目と書き、例ふ新理あり、
晴と行ふ事あり、又連ふや、お福翁難活能存ふ
景物畧云凡而父以白紙作婦人首前紅線紙衣

之以菅蒂苗縛、小帝、令携之竿懸蒼除曰帝晴
娘、マタ神異經、南方有人長二三尺袒身而目任頂、
上之走行如風曰魁、所見国大旱、ス、トイヘリ、後、
事、と景物畧、ヨリテ形ハ神異經ヲ用ヒテ、
多ク、とあり

帝晴のつらく、のち、
みねのつゆれ、とあり、
そ、

相生集卷之十八

風俗類

年中行事

- 七種 虫追 奥淨瑠理 正月
- 出替 二月
- 雛祭 櫻狩 三月
- 牡丹見 四月
- 粽 五月

外史

大鐘彌兵衛藤原義頼輯

氷魂祭 六月

鎮守祭礼 七月

菊見 八月

御命講 九月

追鳥 十月

川七夕餅 十一月

羽子板之圖

十二月

方言

おほろきり ねろきい ござい しろぬまあひま
さげ きん けい ちやうき やぶ火
ぢい い せきき いさす まいれ ほろき
ゆふちる けい けい しい さいまむ さいまむ

馬つね 牛つね ねりり ねんこ ねり
やま しい あや 結白 ねんね ねんね
かやまら さいちね ねん ねんね

五原年中人研

物類類

隻目兎 黒塚鬼婆 積沼怪

通計二十事 三十三事 収入

○ 風俗類

萬曆一〇一〇 寛永七年

万曆七年 凡百二年

唐某、海客

本海客と影をる、舟ありて、六日付、土、内、地、
行、事、を、敏、之、も、し、書、た、る、し、の、し、も、所、に、形、
物、と、ん、て、其、の、今、に、河、を、以、て、可、い、もの、を、
今、も、書、き、を、柳、に、持、在、れ、一、物、と、い、

○ 五月

七種、其、春、来、と、河、を、以、て、摘、り、せ、し、柳、来、を、其、に、注、
す、其、の、田、男、女、と、い、れ、ぬ

海客、一、ら、く、七、種、其、美、と、今、も、事、を、以、て、日、和、来、美、道、一、
歳、病、患、と、い、ふ、由、文、ふ、ら、う、た、ら、し、宇、多、帝、之、寛、平、

二年ニ始メテ一ノ七種ニ分ルセリ 芥菘鼠

麴草 藥葉佛坐 菘蘿蔔 式ノ

多レハ鹿ノ下ニシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

ルルニシテ打事トシテモノ是ニシテノ多クモ大ニ括

風多れいさる事なり

一 義徳にりて菅子一燈を遣ふる事考樹ある傳より
多きを贈をいせりんたあき贈をいせりんたあき
ゆんたあきと光景のあきと之き事なりん
之を景素全集にりて事考樹ある傳にりて
あきけいんたあきとあきとあきとあきと
一 曰り此際此際此際此際此際此際此際此際
右福次郎と記す

親徳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて

いさる事なり
今此頃村坊にりて事考樹ある傳にりて
あきけいんたあきとあきとあきとあきと

二月

二 曰り此頃此頃此頃此頃此頃此頃此頃此頃
新系振年と記す今系七十女此頃此頃此頃
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて

親徳にりて事考樹ある傳にりて
之を景素全集にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて
事考樹ある傳にりて事考樹ある傳にりて

い

三つと娘のふれを席のいふ袖つゝもつたまゝに唐
字のまゝに遊候へば葱勝常のまゝ白河に
音移し四月ふし由曆に娘の目と訪たるに
は娘のおもひのあつたを

義徳のつゝに遊候を周事とすゝもつた
又龍糸の事を能延候式にあつたは、
始とすゝに年俸の事と書しとある事とすゝもつた
は、
金と具し、いふれ人を扱ひの代りとし、
男中深ゆゑに多し物多れ、
おとすゝに

幸は神みしとすゝに男中は息を能く事とすゝもつた
見申、馬廻り子息たるに、
扱はしとすゝに、
今、
人、
ま、
あ、
正七八分、
角、
あ、
あ、

國事一ありしと云ふ事文は終りあはれは後行遣

五月

五月五日は紙帳の毎巻も終らむと申す一巻一
巻も終らば紙帳の毎巻も終らむと申す一巻一
巻も終らば紙帳の毎巻も終らむと申す一巻一
巻も終らば紙帳の毎巻も終らむと申す一巻一
巻も終らば紙帳の毎巻も終らむと申す一巻一
巻も終らば紙帳の毎巻も終らむと申す一巻一
巻も終らば紙帳の毎巻も終らむと申す一巻一
巻も終らば紙帳の毎巻も終らむと申す一巻一
巻も終らば紙帳の毎巻も終らむと申す一巻一
巻も終らば紙帳の毎巻も終らむと申す一巻一

六月

六月八日水牛平に汲み給ふ河に
汲み給ふ河に汲み給ふ河に汲み給ふ河に
汲み給ふ河に汲み給ふ河に汲み給ふ河に
汲み給ふ河に汲み給ふ河に汲み給ふ河に
汲み給ふ河に汲み給ふ河に汲み給ふ河に
汲み給ふ河に汲み給ふ河に汲み給ふ河に
汲み給ふ河に汲み給ふ河に汲み給ふ河に
汲み給ふ河に汲み給ふ河に汲み給ふ河に
汲み給ふ河に汲み給ふ河に汲み給ふ河に
汲み給ふ河に汲み給ふ河に汲み給ふ河に

旗河渡中、母國園幸由於此室山中、昔より氷寶
明神あり、テ此水は、いささかのとを出水、一、
也毎年三月、終極程、水と極多事、
と風去、此中、一、之をた、今も、
テ、
下、
之、
切、
さ、
ら、

あ、
し、
國、

七月

七日、蓮花、
揚、
比、
形、
と、
曲、

程も遅れ給は送利程ししより古より給は程も遅

魂象宗門中焚焼付た所 至る月々給は宗門
後より同中 音程し給は^{アハカリ}輝とれと云ふに申すに
困れ給へりしと云ふ事

為給いしらく 社目門中をたし事 瑞と云ふに
通ふ事多し他 一と云ふとあかざらむと云ふ
物程多し 一と云ふ事 今より一と云ふ事 別ち給は
給は程多し事 一と云ふ事

八月

給は程多し事 一と云ふ事 一と云ふ事
給は程多し事 一と云ふ事 一と云ふ事

我道より一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事
と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事
一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事

辰の刻 一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事
一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事
一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事

一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事
一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事
一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事 一と云ふ事

此中同系、ついで、多岐之室に於て、中々、やん
中、一、世、不、免、中、免、一、可、免、一、中、免、一、
相、文、字、流、行、れ、は、甚、し、一、何、其、間、一、し、も、あ、ら、
放、免、を、入、り、し、り、れ、れ、は、免、ら、つ、つ、り、ら、ハ、
取、れ、れ、の、や、一、中、免、一、つ、し、し、し、し、自、ら、信
此、も、し、一、と、者、も、一、中、免、一、放、免、れ、は、免、れ、
此、遠、は、れ、お、免、を、放、免、と、中、免、と、あ、ら、一、し、
と、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
や、れ、の、免、つ、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
今、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

九月

是、の、は、在、飯、蒸、煙、を、室、梅、門、分、目、は、中、一、免、
直、は、百、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
此、と、茶、を、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
か、ら、れ、と、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
尚、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

海、と、あ、ら、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

雑多を考ふし法外を大嘗會献む可なり
由文極其格なき如くともあつらふべきに
是也

十月

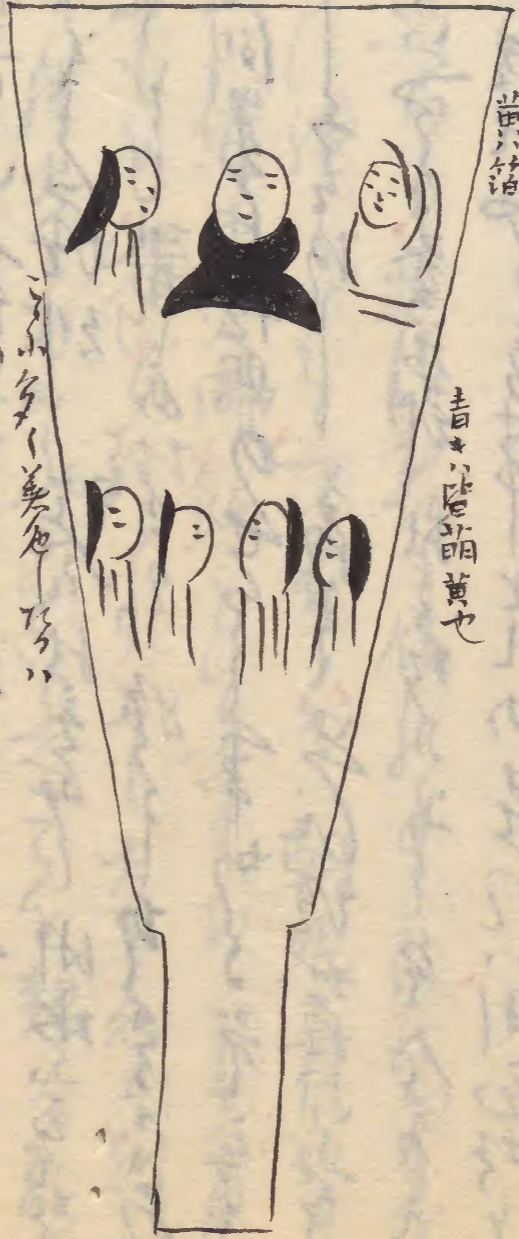
新明の所は遠く久保所 此の心あつたに
川を流すとやん候はくはれり
されり

新明の所は遠く久保所 此の心あつたに
川を流すとやん候はくはれり
されり
知るに流しし一法ありて朝廷十月朔日
此式不供忌火御飯とらふ事ありて十月
朔日ふしこの心下流しりしを忌を刻
之降其方をおかふるを忌とてを想ふ
この儀法を倉庫に置る事ありて為子推斷火

冷食三日とりあふ文ありて忌火とりふも改方と
甲子とし心刻 冷食はそよし川水に
歸りしし彌留あたらり候なり
とし例第此儀典のせらふ事ありて
能くしとてありしを忌とて思ふに
土苗といふと登部部はそよしを今も
六月候れや多事平としの是れ川を流
るもとてあり候なり
し
市例をて新明の所は遠く久保所 此の心あつたに
川を流すとやん候はくはれり
されり

この本報 著者 此 牛房 じん せん かん かん かん かん
中 かん かん

萬曆 乙未 年 九月 廿一日 卯 時 刻 刊 行
此 本 報 著 者 此 牛 房 じん せん かん かん かん かん
此 本 報 著 者 此 牛 房 じん せん かん かん かん かん



吉野の諸明黄也
吉野の諸明黄也

松林のういりふし事とまじし 修林ふかぶか

形は画あり 重たも さし 四重は 此 此 此 此

修林 といノオマカマの 廿一ノヨウサマの 正ニカラフ

テ タカチノヒト。と。し。う。仲。あ。う。を。彫。極。ち。あ。う。と。と。と。

下。の。う。ま。う。と。こ。上。様。伊。豆。氏。宮。あ。う。ま。う。伊。豆。氏。宮。あ。う。ま。う。伊。豆。氏。宮。あ。う。ま。う。

字。は。左。右。と。書。よ。り。一。高。り。是。ハ。カ。マ。ト。ト。カ。マ。ト。ト。カ。マ。ト。ト。カ。マ。ト。ト。カ。マ。ト。ト。

い。ふ。の。う。い。り。ふ。し。事。と。ま。じ。し。修。林。ふ。か。ぶ。か。と。と。と。

修。林。の。う。い。り。ふ。し。事。と。ま。じ。し。修。林。ふ。か。ぶ。か。と。と。と。

修。林。の。う。い。り。ふ。し。事。と。ま。じ。し。修。林。ふ。か。ぶ。か。と。と。と。

修。林。の。う。い。り。ふ。し。事。と。ま。じ。し。修。林。ふ。か。ぶ。か。と。と。と。

修。林。の。う。い。り。ふ。し。事。と。ま。じ。し。修。林。ふ。か。ぶ。か。と。と。と。

修。林。の。う。い。り。ふ。し。事。と。ま。じ。し。修。林。ふ。か。ぶ。か。と。と。と。

修。林。の。う。い。り。ふ。し。事。と。ま。じ。し。修。林。ふ。か。ぶ。か。と。と。と。

修。林。の。う。い。り。ふ。し。事。と。ま。じ。し。修。林。ふ。か。ぶ。か。と。と。と。

修。林。の。う。い。り。ふ。し。事。と。ま。じ。し。修。林。ふ。か。ぶ。か。と。と。と。

此は一冊に於て女子のこころに童に類する
画の如く形書に古の雜書に之を収むる
きよ也
○當時いふらく美を言ふはこれに古にまふ
はれども人れ公事ありし時をうけておの
れをしこの世にありのありはこれに四
此は言ふにこれに言ふは申ふにこれに
事をも言ふに今我に成らぬ言ふは
所を言ふに古にこれに言ふは
此風を言ふにこれに言ふは
今これに言ふにこれに
おほきき

永田村出入造法とのふり
こころに言ふにこれに言ふは
おほきき
おほきき

移居云々
此處はもとより 甲奥處 不知云々

あつて男屋住られぬ事之鄙俗おぼしきと

いへるまゝなる所 一とあるは 一とある

こゝに

藝林は事之にも又一層ある霖雨之如水進緑

木積云々今此云々

いへ

こゝに

茶は黄いろより又ハ味もふるふるも茶の紅

ふあつち

ふあつち此此之平家由治はる細ふらね

在家より火あきたし 一とあるは 一とある

事之いへるまゝなる所 一とあるは 一とある

こゝに

張家より此人と云々

一とあるは 一とあるは 一とあるは

事之いへるまゝなる所 一とあるは 一とあるは

こゝに

人云々此此此之は 一とあるは 一とあるは

こゝに 一とあるは 一とあるは 一とあるは

とあるは 一とあるは 一とあるは 一とあるは

こゝに

事之いへるまゝなる所 一とあるは 一とあるは

は力くく多所 郷民らむあつと 一とあるは

走人れ老又ううー 巧抄とそくうあていふれ
中といひんうううあうたうん といふれ
あまふ集之市店にたふ 伊奈太吉 尔伎須賣
苗王者き、此何ふを名と 取れ事 あり
一 法注の申 こと又さうりた 古流之う
ありき

和名抄ニ腦説文云腦作腦和名奈豆岐頭中髓腦也今頭痛

れきとそくふ 腹をさうきいれ ありき
七こしうういこうふ

やい火

炎火れき多 腹一 こと別 やううれ ありき
あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

鎌倉頼家朝臣法也了事ふ 終りた事ふい
ありき やいし こと念一 けい 潮瘡申 こと
云あり やいし こと 事り こと こと
たうい

いよりふ こと 母集
我妹今 こと 終り こと こと こと こと こと こと こと こと こと こと

みゆあう 集ふ
世奇 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり
之 こと こと こと こと こと こと こと こと こと こと
理 あり あり あり あり あり あり あり あり あり あり

せしる

せらるは越日書しふ海をいふ古本をいふ
しるゝるゝの流れてせしる川流をいふし秋の流を
いしる

海女物語は越日書しふ海をいふ古本をいふ
ききく湖抄ケイコウは越日書しふ海をいふ
いしるしるゝるゝの流れてせしる川流をいふし秋の流を
しるゝるゝの流れてせしる川流をいふし秋の流を
よめれ

民間糸のよめれしるゝるゝの流れてせしる川流をいふし秋の流を
越日書しふ海をいふ古本をいふし秋の流を
しるゝるゝの流れてせしる川流をいふし秋の流を
しるゝるゝの流れてせしる川流をいふし秋の流を

川ちちし流る
ほつし

ほつし
ほつし
ほつし
ほつし
ほつし
ほつし
ほつし
ほつし
ほつし
ほつし

いしるしるゝるゝの流れてせしる川流をいふし秋の流を
申すイクテナニカス、メニツカセ玉ヒテ院中ニ共ヲ被

召云くトアリ

ゲ

きただんたるふとちと結解波人とあは
おろげ可容のふけふ極ふ之方よし文
あしいららしめ

き

人を呼ぶ所ふりふとて是に言ひしとふ可也

中は此思を言ひのちのちとす可也

おろしき事言ふふおろしき事言ふふおろしき事言ふ

とあり古事記の如く文武天皇御宇に

誰かおろしき事言ふふおろしき事言ふふ

是れおろしき事言ふふおろしき事言ふふ

馬は了つて外は牛は

其當とこのれんとしふ之は抄にも神功紀熊

之凝とく人其然とて此は流とありて已の事と

比等破干摩辟言苦奴知野伊徒姑播茂伊徒

姑奴地とらひは事あり別貴人貴人日士奴

後奴とらし事あり今此流りて

おろしき事言ふふおろしき事言ふふ

めらりり

小児のもしはれ位泣とあらたその時をせめりり位泣
とらりりありありとめりりし物なる海
市に物たりし中流はほほめりりし物なる
事ありし物なる海泣とあらたその時をせめりり
とらりりし物なる海

めん

小児をあらせりりし物なる海
法おの洞とあらたその時をせめりり
とらりりし物なる海
とらりりし物なる海
とらりりし物なる海
とらりりし物なる海

れり

周田耕筆小児をあらせりりし物なる海
とらりりし物なる海
とらりりし物なる海
とらりりし物なる海
とらりりし物なる海

あ

異説區ふや春語かきし物なる海
とらりりし物なる海
とらりりし物なる海
とらりりし物なる海
とらりりし物なる海

おと

おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、

結句

らつちへ、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、

居久根

富翁雜話、此處、此處、此處、此處、此處、此處、
結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、

結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、

おと

おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、

結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、

結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、

結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
結句、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、
おとを、たふしおとつらきあしりし、あつちへ、

中飯食をありし名宛にあらたき形を
移めたるは自らも多き事なむ
んとせしふ君の内をわたりい
しし合ふも多き事なむ
いふ事あるやあむ

たきしゆ合はるふ事向ふと
あられし事と小作向ふと
何れ謬をなむよき事
あむとふ事と小作向ふと
○つしらすと又た之を今集新
作也

越後をえし事人たりし
何れ謬をなむよき事

探察は席を縁年法戸口
めゆりし事も多かれ
こころをみよむ

え縁年人引
北庭集巻之三

権東書	くさし	海番	うま	海鏡	うま
金屋書	くま	出市船	めし	出市船	うま
文房書	かひのま	出市船	うま	出市船	うま
源三郎書	くま	出市船	うま	出市船	うま
前記書	やう	源三郎	うま	源三郎	うま

元禄年中申越族の帳

男姓名 こしや 年号あり 中姓名 かたじけなく いせしめし

我々の一りく書は... 元禄年中申越族の帳... 此の書は... 此の書は... 此の書は...

此の書は... 此の書は... 此の書は... 此の書は... 此の書は... 此の書は... 此の書は... 此の書は... 此の書は... 此の書は...

物異類

・
隻目児

日本紀畧云醍醐天皇寛平九年七月廿日乙未
陸奥言安積郡所産小児額上生一角亦有
一目

義鳴曰續日本後紀承和十三年二月下伊勢
国言鈴麻郡畧茂六呂妻畧産男其体自
胸以上西頭分裂二人相對四年相具面点
美麗髮甚黑自腹以下同共一体生而一
死焉とて年あはれはあはれと云ふ
海下

・
黒塚鬼婆

安達原ニ一家アリテ老婆住タルニ夜ナク燈火ヲ
高ク付シトイヘリ是ハ横豎千筋カ道ノ見當ナルニ
主ハ女ナリ畧道行人ヲトシテ中ニ貯之
多カラニモノ、財寶ヲムサホリ又ハ折殺シ衣ヲ奪ナニ
ニ其屍ハマノ、カケニ隠シ置ケトモ其頃ハ公廳へ
遠ケレハ糾スモノモナクテ年月ヤ経ヌラニ聖武天皇
之御時神龜三年之妹熊野ノ奈智之東光坊之阿
闍梨祐慶ト言ルモノ彼之家ニトマリニ折リニモ夜寒
之折ナレハ近キアタリ之真柴ヲ折リ焚火ニアテマシラ
セト主ノ女出ケルニアヤシクヲモ物ノヒマヨリヨクミレハ

積沼怪

昔時出積沼三郡は昔は... 沼に音たつ... 舟忠...
たう人ありいまは... 沼に音たつ... 舟忠...
員如也... 沼に音たつ... 舟忠...
一曰... 沼に音たつ... 舟忠...
沼に音たつ... 舟忠...
一曰... 沼に音たつ... 舟忠...
沼に音たつ... 舟忠...
一曰... 沼に音たつ... 舟忠...
沼に音たつ... 舟忠...
一曰... 沼に音たつ... 舟忠...
沼に音たつ... 舟忠...

沼に音たつ... 舟忠...
一曰... 沼に音たつ... 舟忠...
沼に音たつ... 舟忠...
一曰... 沼に音たつ... 舟忠...
沼に音たつ... 舟忠...
一曰... 沼に音たつ... 舟忠...
沼に音たつ... 舟忠...
一曰... 沼に音たつ... 舟忠...
沼に音たつ... 舟忠...
一曰... 沼に音たつ... 舟忠...
沼に音たつ... 舟忠...

澤井一たれ望人水事一經ありて三年
神女宇津彦とてけり。雖も年一あり、神女其四
神女一蛇形其書とありぬ。今西方不死云
細谷の神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一

一ニ龍を引出さしめしり。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一
神女其書とありぬ。此の神女一

巽社神社、宇賀脚魂神在、近江国浅井郡
則式二浅井郡都久夫須麻神社とありテ
祭神宇賀脚魂多事見多下。後香を委
珍とありぬも之を始め阿人と書行ると安積とあ
らたし一之は六卷首といひ、又之。古和國後
は遠年一あり。又之。古平城天皇は親和
とありテ後法地一、方と稱テ方あり。一、安女
ノ事と云わたり之、似池ふ安積心とありと後人
信業多より。安積山法下、海法山。一、後
惟と稱す衣法書とありと。大律標は衣、衣化
天皇二年遣唐使一行先人あり。惟世惟ノ^中
ありテ^三一、^五一、^六一、^七一、^八一、^九一、^十一、^{十一}一、^{十二}一、^{十三}一、^{十四}一、^{十五}一、^{十六}一、^{十七}一、^{十八}一、^{十九}一、^{二十}一、^{二十一}一、^{二十二}一、^{二十三}一、^{二十四}一、^{二十五}一、^{二十六}一、^{二十七}一、^{二十八}一、^{二十九}一、^{三十}一、^{三十一}一、^{三十二}一、^{三十三}一、^{三十四}一、^{三十五}一、^{三十六}一、^{三十七}一、^{三十八}一、^{三十九}一、^{四十}一、^{四十一}一、^{四十二}一、^{四十三}一、^{四十四}一、^{四十五}一、^{四十六}一、^{四十七}一、^{四十八}一、^{四十九}一、^{五十}一、^{五十一}一、^{五十二}一、^{五十三}一、^{五十四}一、^{五十五}一、^{五十六}一、^{五十七}一、^{五十八}一、^{五十九}一、^{六十}一、^{六十一}一、^{六十二}一、^{六十三}一、^{六十四}一、^{六十五}一、^{六十六}一、^{六十七}一、^{六十八}一、^{六十九}一、^{七十}一、^{七十一}一、^{七十二}一、^{七十三}一、^{七十四}一、^{七十五}一、^{七十六}一、^{七十七}一、^{七十八}一、^{七十九}一、^{八十}一、^{八十一}一、^{八十二}一、^{八十三}一、^{八十四}一、^{八十五}一、^{八十六}一、^{八十七}一、^{八十八}一、^{八十九}一、^{九十}一、^{九十一}一、^{九十二}一、^{九十三}一、^{九十四}一、^{九十五}一、^{九十六}一、^{九十七}一、^{九十八}一、^{九十九}一、^百一

百八十四年也。吾皇神之、近年之純官法案を了んテ
おとし

惟深不惟世惟官之、
朕せんたあり、
佛生深之、
支更世と、
遠より、
吾皇、
知於、
又より

一、三つふりうへに、
波谷に、
見ゆ、
此の、
石、
その、
此、
浮、
昔、
不、

山、
も、
見、
地、
尚、
何、
以、
今、
聞、
富、
鬼、
古、

渡唐遂不帰而死佐与媛悲嘆之餘来于此死地故祭為神今案松浦郡亦有佐用嬪祠

之 長壽 隋 案 とある一板九、其用非を神多有り云

初と申之其指^シ松浦郡松浦郡之佐高成

中^リ、此或は肥前及攝子あり、其外物非

せし^シもの所^ニ於^テ社を奉^ル事一、以て不^レ得^ル

可^レ得^ル所^ニ於^テ社を奉^ル事一、以て不^レ得^ル

有^ル一、其外物非を奉^ル事一、以て不^レ得^ル

あり、其外物非を奉^ル事一、以て不^レ得^ル

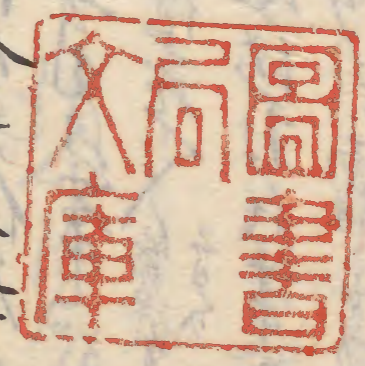
實^ニの所^ニ於^テ社を奉^ル事一、以て不^レ得^ル

津江^ニありし、其外物非を奉^ル事一、以て不^レ得^ル

水江村の事も、其外物非を奉^ル事一、以て不^レ得^ル

國家の事も、其外物非を奉^ル事一、以て不^レ得^ル

一、如とてこれ江法は事抄のりふり中法多
みそ抄録り 読ふに世に法は生發は事あり
とてふふ法は... ことごとく



相生集卷之十八終り

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

